

訪問記

見たり聞いたり、ソ連の2ヶ月

郡 司 好 喜*

寒い国のことは寒い時に訪れてこそ意味があるといつた妙な心がけで訪れたモスクワでの2ヶ月、私達の住む社会とは仕組みが逆になっている中で思考の回路のちがった人々と過ごしたこの短い時間は戸惑いと緊張に充ちたものであり、また消化不良になりかねない程の知識を沢山与えられた時間でもありました。

研究所あれこれ

1975年12月2日の朝、ホテルまで迎えに来てくれたレビアキン博士(A. B. Ревякин)と一緒にバイコフ記念冶金研究所の守衛室を通つてから、翌年の1月29日の夕方研究室の仲間と一緒に守衛室を通るまで、1ヶ月半にわたる楽しい研究室での生活と2週間の見学旅行が主な生活となりました。私が訪れました研究所の大部分は、日・ソシンポジウム訪ソ使節団の皆様がしばしば訪問され、その内容は詳細に紹介されている所ですのでそれらの報告書を参照していただきたいと思ひます^{1)~3)}。

1. バイコフ記念冶金研究所

サヴィッキー博士(E. M. Савицкий)を所長とするこの研究所は、科学アカデミーに所属するソ連最高の冶金研究所であり、所員は1300人にもおよぶ大きい研究所であります。1975年度の研究員は547人、その内訳はアカデミー会員2人(アゲーフ博士、リカーリン博士)、アカデミー会員候補3人(サヴィッキー所長もその一人)、博士36人、修士232人、一般研究員274人となつて



写真1 冬のバイコフ記念冶金研究所

いました。修士(Кандидат)は大学卒業後数年で取得できるので日本の博士に近く、外国人に対しては博士として紹介します。(私も今後は博士として紹介します)。一方博士(Доктор)を取得するには何人かの研究員を指導して多くの論文を書かねばならず、相当の年配にならないと取得できないので大層権威のあるものようがあります。さらに博士の上に教授の称号のある格の高い研究者も居られます。

547人の研究員以外は管理あるいは支援部門の人達であります。研究室に配属されている補助者はあまり多くないようであります。研究室は21、室長(日本では部長に相当する)の下に何人かの主任研究員と研究員が配属されています。研究室とその室長は次のようになっています。

1. 純金属研究室 (B. A. Резченко)
2. サマーリン記念溶融金属の物理化学研究室 (B. И. Кашин)
4. 合金の物理的-化学的解析研究室 (O. C. Иванов)
5. 非鉄および稀土類金属冶金の物理的-化学的基礎研究室 (Г. Н. Звиаддзе)
6. 分析研究室 (A. И. Пономарев)
7. クデュツォーバ記念構造用鋼と合金の金相学研究室 (O. A. Банных)
8. 金属合金の化学研究室 (И. И. Корнилов)
9. 金属への放射作用の研究室 (Л. И. Иванов)
10. 金属材料強度の研究室 (B. C. Иванова)
11. 半導体材料研究室 (B. C. Земсков)
12. 難溶融金属および稀土類金属合金の研究室 (E. M. Савицкий)
13. 金属と合金の結晶化学研究室 (H. B. Агеев)
14. 電子顕微鏡と物理的研究法の研究室 (И. И. Новиков)
15. 金属材料の塑性変形の研究室 (И. М. Павлов)
16. 冶金と材料処理におけるプラズマ法の研究室 (H. H. Рыкалин)
17. 放射パイロメーターの研究室 (Д. Я. Свет)
18. 非鉄および軽金属合金の研究室 (M. E. Дриц)
19. 薄膜材料研究室 (K. A. Осипов)
20. 複合材料研究室 (M. X. Шоршоров)

* 金属材料技術研究所 工博

21. 金属の実験技術の研究室 (Л. А. Петров)

22. 科学的研究の効率の研究室 (Б. В. Егоров)

第3研究室がないのは第2研究室に合併されたためですが、そのために第2研究室は数10人の研究員で構成される大所帯になっています。記念のためにその名が残された故サマーリン博士 (А. М. Самарин) は、研究所正門のバイコフ博士の胸像、玄関正面のレーニン像とともに唯一人玄関の壁にそのレリーフがはめ込まれていることから、偉大な学者であり指導者であつたことが理解される人であります。

その運営はさだかでありませんが、複雑な問題を関連した分野の研究者が総合的に解決するために九つの科学技術委員会が組織されています。1975年の研究所要覧には、これらの委員会の委員長の一人であるアゲーフ博士 (Н. В. Агеев) が日本鉄鋼協会の名誉会員に選出されたことが記述されていました。このことから、鉄鋼協会との結び付きを大切に考えていることが推察されました。

研究所を訪れた最初の日、“研究するのか”というカーシン室長の質問に、“研究はやらす沢山の友人を得て帰りたい”と答えてから私の気ままな研究室生活が始まりました。第2研究室の主任研究員の一人であるレビアキン博士の部屋に机を貰い、論文を読み、多くの研究者と討論するかたわら部屋の仲間達と気のおけない時間を過ごすことが日課となりました。

前に述べましたように、研究室長の下に何人かの主任研究員が属し、それらの主任研究員は何人かの研究員と一緒に研究を推進しています。カーシン室長の第2研究室は研究員が数10人の大所帯、多くの主任研究員が独立したテーマについて研究しております。溶鉄のみならずいろいろな金属および合金とガスの相互反応を研究しているレビアキン博士、ブールツェフ博士 (В. Т. Буруцев)、酸化物固体電解質のアベリン博士 (В. В. Аверин)、リムド鋼の基礎反応を追求しているカラーショフ博士 (Р. А. Карасев)、溶鋼の取鍋真空処理を研究し続けるノービック博士 (Л. М. Новик)、溶鉄の脱りんおよび脱硫反応に取り組むパリャコフ博士 (А. Ю. Поляков) とダシェーフスキー博士 (В. Я. Дашевский) 50 kg の小型転炉で奮闘するパベガーイラ博士 (В. М. Побегайло)、電子ビーム溶解を最高の方法と信じているマクーニン博士 (М. С. Макунин)、ESRにおける介在物の挙動やプラズマ溶解を研究している大橋徹郎さん (新日鉄・広畑) の学友チェルカーソフ博士 (А. Д. Черкасов) などがおもなメンバーです。

レビアキンの部屋には日本にも知人の多いコージナ博士 (Л. Н. Козина)、目下修士論文に取り組んでいる二人の若い研究者カネフスキー (А. Г. Каневский) とサマーリンの孫娘であるグラモーバ (М. М. Громова) がおり、技術者サローカが実験を手伝っております。小

な部屋に高周波発振機2台と日立の質量分析計が置いてあり、それらに手造りの装置を組合せて実験しております。

カーシン室長には、ソ連における転炉の問題点についていくつかの質問をいたしました。なにぶん英語を絶対に話してくれないので十分に理解できない部分があつたにしろ、参考になる答は全く得られませんでした。

その他の研究室に属する人々として、ペレットの還元強度を研究しているチェルヌーシェフ博士 (А. М. Чернышев)、プラズマ精錬のエローヒン博士 (А. А. Ерохин)、酸化物の熱力学や脱酸反応の権威であるクリコフ博士 (И. С. Куликов) らと親しく討論することができました。

クリコフ博士を訪れたときに、まだ表紙が印刷されていない仮とじの著書「金属の脱酸」を紹介されました。この本は鉄だけでなく、ニッケル、コバルト、銅およびいろいろな高融点金属の脱酸反応の熱力学を書いたもので、貴重なデータも収録されているクリコフ博士の力作であります。そばに居たシチュードリン博士は“君はもう脱酸の研究をやめなさい”と言つてその本を推奨してくれました。私が帰国する前の日にこの本が完成し、前の仮とじの本と一緒にプレゼントされましたが、この力作を日本の研究者、技術者が利用されますようおすすめしておきます。

太陽が顔を出す9時30分ころホテルを出発して10時ころ研究室に入るとすぐお茶の時間となり、隣の半導体研究室からミーラ (コージナ女史) の親友ジーナが訪れレビアキン、マリーナ (グラモーバ)、アキム (カネフスキー) が一緒にテーブルにつきます。研究所の食堂で食事を済ましてくるとまたお茶、私の帰る5時前にお茶といつたスケジュールで毎日を楽しく過ごさせてくれました。時にはワインやウォッカの壺があげられることもあり、3人の女性が私よりもはるかに強くウォッカを当然のように飲み干す美女の姿に目を丸く、することがしばしばありました。こうしたくつろぎの時間には私の下手なロシア語が着にされ、私のモスクワ生活、日本のこと、ソ連人の日常生活などが話題の中心となり彼らの考え方や生活を知るのにこの上ない貴重な時間になりました。

他の部屋に行くときには誰かが案内してくれ、用事が済むと必ず迎えに来てくれるという念の入れ方でした。日本ではこうしたことが外国人を監視するためと解釈されているようですが、私の体験ではこれらはすべて彼らの親切心のあらわれであると理解いたしました。

カリキュラムと称する第2研究室の研究発表会に二度招待され、研究討論を実際に傍聴させて貰いました。ブールツェフとノービックのグループの研究の現状の報告と問題点の討議を行なつたもので、すべてのピラを重ね合わせることなく万国旗のようにかかげて約一時間紹介したあと、カーシンの司会のもと主任研究員が主となつて



レビアキン



カネフスキー



ザリフェアーンツ(ジーナ)

グラモバ コージナ
写真2 研究室の友人達

約一時間討論する発表会でした。一般にソ連人は討論を好まないと理解していたのですが、このカリキュラムでの激しい討論はそうした先入観を全く打破つてしまうものであり、身ぶり手ぶりよろしく口角泡をとばしながら“タワーリシチ”と肩をたたいて激論する有様は私を驚かすに十分のものでした。あとでジーナが教えてくれた所によると、「論争は真理を生む」という古い諺があるという位にもともと論争好きな国民である上に、革命の過程で自分の立場を弁護する必要上そうした習慣が身に

ついたのかも知れません。

2. モスクワ鉄鋼と合金大学

高等教育省に属するこの大学は、ソ連における金属関係の最高学府であり、きわめて古い建物の中に新しいアイデアが一杯という印象を受ける大学でした。見学に一日、私の研究の紹介と討論に半日と二度訪れる機会を得ましたが、二度の来日と彼の著書の翻訳で知り合ったヤボイスキー教授 (В. И. Явойский) と電気冶金のグリコーリヤン教授 (В. А. Григорян) の研究室を見学させていただきました。

この大学の研究費は全部工場からの供与でまかなわれており、グリコーリヤン教授が“私は1ルーブル貰つたら5ルーブルにして工場に返す”と自慢していましたし一人の老研究者が“お前の研究テーマはどのようにして決めたか”と質問してきたことなどから、技術の開発および改善に直結している彼らの研究態度をうかがい知ることができました。

主な研究テーマは、酸化物固体電解の利用、プラズマ精錬の基礎反応、非金属介在物の生成過程、連続製鋼法の基礎反応などでありました。連続製鋼は噴霧製鋼法であり、その基礎反応にヤボイスキーの息子が同じ研究室で取組んでおりました。またプラズマ精錬は重要な課題であり、一人の若い研究者が2台のプラズマ炉をもつてガス反応を研究していましたし、学生の実験工場には、100 kgのエルー炉とともにプラズマ炉が設置され、私のために早速操業してくれるほどの熱心さでありました。

3. ゲルジア冶金研究所

モスクワから1700km、コーカサス山脈を越えてトルコの国境近くにゲルジア共和国がありますが、その首都トビリシにある科学アカデミー所属の冶金研究所に約一週間滞在いたしました。この研究所の使命はコーカサス山脈の南に産する資源を効果的に利用する技術の開発にあります。あまりに広大な国であるために陸上輸送が困難であり、これを克服するためにいろいろな方法が考えられていることもこの国の工業の特色の一つでありましょう。またこの研究所の研究費は科学アカデミーと工場の両方から支給されていますが、研究費を多く貰えるということで工場の仕事を進んで引受けるということがありました。

トビリシからキエフの約2週間の旅にはバイコフ記念冶金研究所の厚意でマリナ嬢が同行し、細かい配慮をしてくれました。以前は外国人の監視という意味があつたかも知れませんが、今は外国人に旅を楽しんで貰うための親切であると思えますし、私はその御厚意に心から感謝しております。

そもそもトビリシに長く滞在することはレビアキンや部屋の仲間が私の休養のために計画してくれたことでありました。その上、この研究所と故サマーリン博士の関係はきわめて密接であり、多くのサマーリン崇拜者が居



写真3 グルジア冶金研究所の人達
(左端より、タワーゼ所長、シーグア博士、アデラパーゼ部長、筆者、マリナー嬢、オークレ副所長)

られます。孫娘マリナーと同行した私は当然のことながらその恩恵に浴することになり、夢のような歓待を受けて参りました。

強粘結炭が 1 t 50 ループルもするために高炉の利用は全く考えられず、マグネタイト精鉱ペレットを利用する直接製鉄、フェロアロイの製錬技術を利用した複合脱酸剤の製造などが注意をひいた研究テーマでした。

毎日一つの研究室を訪ねて午後 2 時ころまで見学と討論を行ない、その後はその研究室が責任をもって私とマリナーを歓待してくれました。夜中まで市中を案内してくれた複合脱酸剤の研究室長アルセニシュビーリ博士 (A. Ю. Арсенишвили)、古いワイン工場に模した郊外のレストランまで連れて行ってくれた還元ペレットを研究するモシヤ博士 (D. B. Мосия)、私の講演の通訳を務め、グルジア・パンの工場やスターリンの母の墓まで案内してくれた分析室長ヘラデナシビーリ博士 (3. Ш. Херодинашвили) の暖かさは昨日のことのよう思い出されます。

最後の日は日曜日であつたために、タワーゼ所長 (Ф. Н. Тавазе) が郊外にあるグルジア独特な石造りのレストランに招待してくれました。所長の他、オークレイ副所長 (Л. Н. Оклей)、アデラパーゼ管理部長 (Г. Н. Одзиладзе)、私達の旅行を細かくリードしてくれたシーグア室長 (Т. И. Сигуа) らが出席され、ガビシアニ博士 (A. Г. Габисиани) が特別に調達してくれたコマチカラという有名なグルジア・ワインとグルジア料理を存分に振舞ってくれました。酒宴は午後 1 時ころから 7 時ころまで続いたようですが、グルジア地方の乾盃の作法に従ってリミット以上にワインを飲み過ぎ、「さんさ時雨」など歌って張切り過ぎた故でしょうか、日の落ちる前に完全にダウンしてしまいました。

北海道と同じ緯度にあり、温泉の街でもあるトビリシ

は非常に暖かい気候に恵まれているばかりでなく、住んでいる人達の心の暖かさも格別でありました。研究所の人々や街の人々から受けた心温まるもてなしは終生忘れ得ぬ思い出になるだろうと思います。

4. パトン記念電気溶接研究所、鑄造問題研究所

キエフにあるこの二つの研究所は科学アカデミーに属しますが、私達鉄鋼製錬にたずさわる者には非常に関係の深い所でありましょう。

パトン記念電気溶接研究所は所員 5 000 人にもおよぶ大研究所、門を入るときには軍人が身分証明書を検査する特殊な研究所でもあります。

再溶解法の指導者の一人であるグリゴレンコ博士 (Г. М. Григоренко)、と通訳のフォーミナ女史 (Фомина) が案内してくれました。来日したことのあるフォーミナ女史は非常に分りやすい英語を話し、日光のことや日本の知人のことも話してくれました。

グリゴレンコからプラズマ再溶解と ESR の話を聞いてから 1 t インゴットのできるプラズマ再溶解炉を見学し、さらに研究所の紹介およびエレクトロスラグキャスティング (ESC) の映画を観賞した。ソ連の再溶解に関する研究は ESR から ESC、プラズマ再溶解へと向けられつつあり、軍事目的のない日本とはそのレベルに大きな差のあることを知りました。おそらく、ESC によって 200 t 以上のインゴットが溶製される日はきわめて近いだろうと推察されます。

私のソ連訪門の目的の一つに鋼の凝固現象についての研究の動向を知ることがありました。所員 500 人の鑄造問題研究所は、金属の凝固に関するソ連唯一の総合研究所であり、広い守備範囲をもっています。エフィモフ所長は不在であつたが、スコック博士 (Ю. Я. Скок)、ビフェリヤーイフ博士 (В. Б. Вихляев)、草川先生の所に滞在し金属材料技術研究所も訪問したザハルチェンコ博士 (Э. В. Захарченко) などが研究所の主な業績を説明してくれました。長年研究をつづけている鋼のモディファイーターの効用やインゴットの偏析と固液共存域の関係などが主なものでありました。また日本の連鑄技術や造塊技術について矢つぎばやに質問してきたことなどから、日本の技術に対する関心の強さが察せられました。

御存じのように、ソ連には英語を話せる人がきわめて少なく、また多少話せても話す人がきわめて少ないのが実情です。したがって見学や討論の大部分は私の下手なロシア語で続けられたために、見落しや誤りがあつたかも知れませんが、プレゼントされた膨大な論文集を参考にはしておりますが、もし誤りがありましたときは深くお詫び申し上げます。

現在ソ連は世界一の鉄鋼生産国であるにもかかわらずその 90% は平炉で生産されています。何故? もちろん完全に理由をつきとめることはできませんが、社会主

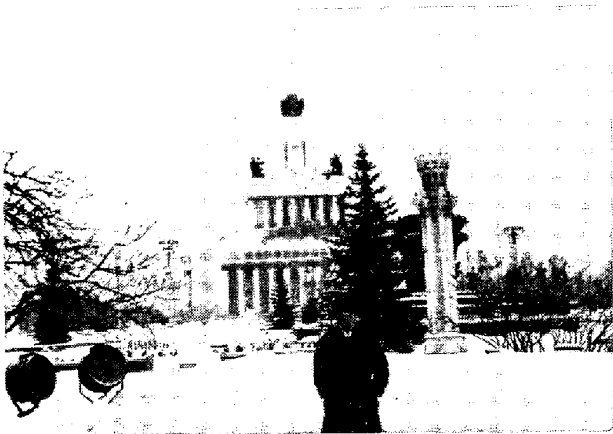


写真4 全ソ国民経済達成博覧会場にて
(B.Д.Н.Х.)

義国特有のノルマとか設備の有効利用が原因だろうと推測してきました。さらに日本とは異なつた必要性から再溶解法がいちじるしく発達していることも注目すべきことであり、次々と公表される情報を注意深く収集することが重要だろうと思います。

市民生活の中から

革命後60年、ソ連はいま完全な社会主義国であり、共産主義社会を目指して前進している国であります。考え方の回路がわれわれと全く異なつている人達と過ごすことへの好奇心と緊張感をもつて訪れた極寒のモスクワでしたが、そこで過した短い時間で得た感想を一つ、二つ、

気候：

モスクワの緯度は56度でカムチャッカ半島の中部と同じであるのに現在600万人が文化生活を営んでいます。気温は平均して -10°C 前後、時には -20°C 以下になりますが、意外だつたのは雪が少なく、風があまり吹かないということでした。街を歩いて寒くなつた時にはどこでも建物の中に入ればよく、地域暖房によつて地下鉄も含めあらゆる建物は $20\sim 25^{\circ}\text{C}$ に保たれています。こんなに寒いからさぞ厳重な防寒服装だろうと思いましたが、スラックスの御婦人は非常に珍らしく多くの人は厚手のソックス、スカートにオーバーといった服装でした。 -20°C の朝、まだ薄暗い8時過ぎに高い建物の屋根修理が平常どおりに行なわれておりましたし、どうやら低温に対する感覚がわれわれとは随分違つているようでした。

2ヶ月の間、平均すれば東京よりずっと安定した環境だつたのでしょうか風邪一つひかずに過ごすことができました。人間生活を妨げるのは寒さではなくて雪なのだろうと結論できるように思いました。

交通機関：

地下鉄はソ連の誇る交通機関であり、おそらく軍事的であろうと思いますが100mの地下には素晴らしい駅が建られています。駅やプラットホームは大理石と花崗

岩で造られシャンデリヤが輝き、しかも各駅が異なつたデザインで建造されています。日本のものより速いエスカレーターでホームに降りる時間と一駅区間の走行時間があまり変わらないほどの深い所にある宮殿のようなホームは塵一つない清潔さが保たれています。清掃がひんぱんに行なわれているわけでもないのに清潔なのは、切符の代わりに5カペイカ銅貨を用い、駅構内が禁煙になつているためだろうと推察します。トビリシの地下鉄も程度の差こそあれ同じようなものでありました。

バス、トロリーバスおよび市電も5カペイカ以下の料金でワンマン運転ですが、安い料金の代わりに厳しい検札があり、切符をもつていなければたちどころに1ルーブルの罰金をとられます。一般の交通機関が発達しているのでタクシーは贅沢な足、乗車拒否は当然のことになつているようです。

労働：

女性と男性の労働条件が全く同じであることも社会主義国の大きな特徴でありましょう。筋肉労働、頭脳労働を問わずあらゆる職場に婦人が居り、私の泊つていた科学アカデミーホテルでは守衛さんと床屋さん以外は全部女性でした。研究所の職員の半分はもちろん女性ですがバイコフ記念冶金研究所の21人の室長のうち女性が一人というのは理由が分かりませんでした。あるいは、家事や育児は女性の仕事と決まつているようなのでその分だけ女性の負担が大きいのでしょうか。とにかく若いお嬢さんが一人で徹夜就業したり、鉄のバールで街路の水を砕いているボリューム豊かなおばさん達の姿を見ておりますと女性解放の真の意義を考えさせられました。

週休二日制は1967年から実施されておりますが、有給の年休も少なくありません。年休は職種、年令、成績によつてその量が決められていますが、35才のコーシナ女史は年42日、しかも彼女は1975年にほとんど利用していないので76年は3ヶ月も休暇があることになり、楽しい休暇プランを立てているようでした。

国民の平均月給は150ルーブルですが、研究所長でも600ルーブル、若い研究者でも100ルーブルとあまり差がありません。男子は60才、女子は55才が定年で年金はそのときの月給の70%、最高120ルーブルまで貰えます。定年を過ぎても働くことは自由であり、どこの職場にもものんびり働いている老人達を見かけるのはそのためだろうと思います。研究所でも上級幹部は高令者であります。その他に定年を過ぎた一流の研究者があまり束縛されずに研究を続けて居られるようでした。

ソ連の労働は徹底した分業制になつており、街の売店や食堂でも自分の仕事でない限り絶対に手伝わないので時として長い行列のできることもあります。研究所でも研究員と補助者の区別は厳然としており、軍隊の将校と兵卒と同じ位の差別があるようです。そういうことが原因なののでしょうか、自分の子供は大学を卒業させて高給

の得られる職業に就かせるよう努力しているようです。親子二代の研究者が同じ研究所に働いている例が数多く見られ、階級の分化が起こっているという印象を強くいたしました。

物資と物価：

肉やパンのように生活の維持に必要な物資は豊富でしかも安価ですが、衣類や家具は一般に高いような印象を受けました。しかし贅沢品はきわめて高く、カラーテレビが 1000、自動車が 3000~6000 ルーブルのように普通の市民には手の届かない値段になっています。

日本では汨濫している小型電卓はなく土産品として非常に喜ばれますが、それを造る技術がないのかと笑うことは大きな誤解だと思います。800 個にも及ぶ人工衛星を打上げ、無数のミサイルを所有している彼らにその技術がないはずはありません。

ソ連国内でもつとも辛いのは食事の難しさだろうと思います。ビュッフェ、スタローバヤ、カフェ、レストランと順次に高級になる食堂ですが、ビュッフェはその名のおり軽食であり、街のスタローバヤは美味しい食事に馴れた日本人には不向きようです。結局カフェかレストランに行くことになるのですが、最悪の場合一人の食事を拒否されることもありますし、一人で座っていると何時になつても食べさせて貰えなかつたりと腹の立つことばかりです。一人の時は何とかが相席の相手を探す以外に食事にあつて手段はないと考えるのが常識のようでした。物を買う場合もそうですがとにかくサービスは全くないと考えるべきで、逆に“有難う”と言わなければなりません。モスクワ市民の立場で言えば“売つて貰う”のですから当然なのでしょうが、その他に物資が極端に少ない時代にこうした習慣が定着したのだらうと推測することもできましよう。

悪いサービスと非能率性はわれわれから見ると全く奇異に感じますが、それは体制の相違で止むを得ないと理解するしかありません。しかし今年の第 25 回共産党大会でこの 2 点が指摘されて居りましたので、ソ連国内でも問題となつており今後の改善が期待されるように思われます。

娯楽など：

テレビはカラー放送もあり、スポーツ、劇映画や音楽などが娯楽番組の中心になっています。

しかし圧巻はなんと言つても生の音楽や観劇でしょう。私も 2 ヶ月の間に 7 度バレエやオペラなどに足を運び、世界最高と言われる芸術の一端に接してきました。ポリショイバレエでも最高の席が 3.5 ルーブルと安いばかりでなく、沢山の劇場やコンサートホールがあつてその気になれば比較的容易に観賞できることは本当に羨しいことです。観客は日本とは逆にお年寄が多く、芸術

を楽しみながら観賞している姿がありありとうかがわれました。

もう一つ、ソ連国民の娯楽は読書だろうと思います。100 ルーブルの月給を貰うマリナ嬢は月 20 冊の本を買ひ、残りは全部食費になるというのですから驚かされます。“管理された本を与えて管理している”と批判したい所ですが、マンガの本しか読まない日本の若い人達とその将来を比較すると非常に淋しくなつてきます。

む す び

短い期間ではありましたが、“ソ連とはどんな所か？”という疑問にいくらかでも答えられる気持で帰つて来ることができました。レーニン理論に固執して進歩がないとか、組織が腐敗しているとか、生産が非能率化しているとか、階級が分化しているなどいくつかの欠点が指摘され社会主義の国々から批判を受けているようであります。

しかし国民の側からみると、インフレの心配もなく、老後は完全に保障され、急速に社会主義化しつつある世界の盟主であつて国の富は着実に増加し、資源は尽くる所を知らない国であります。国民の多くは純粋な気持をもつており、小さな不満はあつても大きな不安はないというのが事実だろうと思います。

日本とソ連の将来の関係はどうなるのか？それは極めて難しい問題かも知れませんが、われわれが正しくソ連を理解しなければならないことには変りないと思います。現在の表面的な事実とか、日本の立場のみから理解しようというも正しい理解が得られないような気がいたします。

帰国するときに、“日本とソ連の金属の研究分野のパイプになつてくれ”と言われたサヴィッキー所長の期待に全面的に応えることは難しいかも知れませんが、相互の理解を深めるためにできるだけの事をしたと思つております。

終りに、私のソ連滞在に御尽力いただいた金属材料技術研究所の荒木透所長をはじめ所員の皆様、私をバイコフ記念冶金研究所に御推薦下さいました的場幸雄先生と不破祐先生に心から御礼申し上げます。

また私のよちよち歩きを支えながら私の生活を快適にしてくれた多くのソ連の友人達に Большое Вам спасибо! Желаю наилучшего. と御礼を申し上げます。

文 献

- 1) 日本鉄鋼協会派遣団：鉄と鋼，55 (1969) 8, p. 730
- 2) 日本鉄鋼協会訪ソ学術使節団：鉄と鋼，58 (1972) 9, p. 1333
- 3) 日本鉄鋼協会訪ソ学術使節団：鉄と鋼，61 (1975) 15, p. 3167